

あさ吉夜話

■ 其の一

－ 桂あさ吉さんの紹介 －



このコーナーの水先案内人を務めていただく桂あさ吉さんのご紹介を少ししておきます。

港区出身のあさ吉さんは、1993年に米朝一門の桂吉朝師匠へ入門。古典はもちろん、創作落語や英語落語もてがけ、海外公演の経験もありという、若手ながらなかなかの実力者。

ごらんのとおり、ジャニーズ系の甘いマスクを持つ、かなりイイおとこ。みなさん、ご期待あれ。

あさ吉夜話

■ 其の二

－ 天保山 －



大阪城天守閣蔵

どうもこんにちは、桂あさ吉です。
今回のテーマは「天保山(てんぽうざん)」。
天保山と言えば、標高4.5メートルの日本一低い山で知られていますが、安治川を浚渫(しゅんせつ)した土砂を積み上げて作った人工の山やそうです。それでは、しばらくの間おつきあい願います。

父　－よーし、明日の休みは家族で出かけよう！みんなはどこに行きたい？

母　－お母さんは海に行きたいわあ。

息子－僕は山に行きたい！

娘　－私は遊園地がいい。



父　－みんなバラバラやなあ…うーん。よし、それじゃあ天保山に行こう。あそこには山もあるし、『海遊館』があるから海も味わえる、おまけに、遊園地顔負けの大きな観覧車がある。

みんな－賛成！

父　－どうや、今日はみんな楽しかったか？

息子－すごい楽しかった。でも、僕一つだけびっくりしたことがあんな。

父　－びっくりしたこと？ああ、海遊館のジンベエザメか？

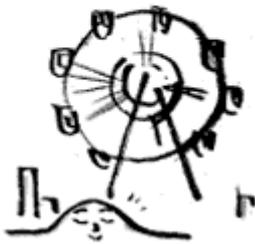
息子－違うねん。

父　－ほな、観覧車の大きさにびっくりしたんか？

息子－違う。

父　－じゃあ何や？

息子－びっくりしたわ。
だって、観覧車より小さい山って初めて見たもん。



おあとがよろしいようで。

あさ吉夜話

■ 其三

－ 安治川 －

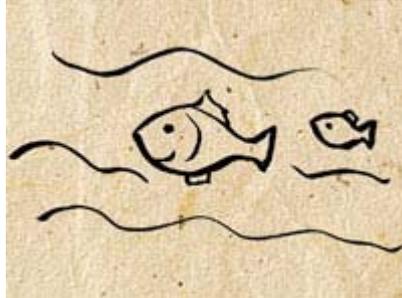
どうもこんにちは、桂あさ吉です。今回のテーマは「安治川(あじがわ)」です。以前見た錦絵に描かれた天保時代の安治川の景色はすばらしく、今も目に焼きついています。本当にきれいな風景で、まるでおとぎ話の世界でした。という訳で、ちょっとその時代にタイムスリップ。まさに、古典落語の時代ですね。

喜六ー清やん、何か今日はえらい人やな。

清八ーああこれか、おまはん知らんのかいな、これは「御救大浚(おすくいおおざらえ)」言うてな、安治川の底にたまった土砂を掘って運んでんねや。

喜六ーなんで、そんなことすんねん？

清八ー何にも知らんやっちゃなあ、それをせな舟が通られへんなるし、川底が上がったら、洪水になりやすいんや。



喜六ーへえー。けど、みんな楽しそうに仕事してるなあ。太鼓や鉦(かね)で囃し(はやし)たてて、なんや祭りみたいや。

清八ーほんまやなあ、ここの人は根っからの陽気な人が多いんかもなあ。

喜六ー楽しそうやな…。わいもよしてもらおう。

清八ーおい。かくれんぼやないねんで、これはちゃんとした、お上の仕事やで。

喜六ーかめへんがな、人が多いほうが仕事もはかどるやろ。おーい、わいも手伝うでー！

清八ー……おーい喜六！ほんまに行きよった。まあええか、安治川の土砂をすくう仕事やし。お上も水に流してくれるやろ。



大阪歴史博物館蔵

おあとがよろしいようで。

－ 波除 －



大阪歴史博物館蔵

どうもこんにちは、桂あさ吉です。
今回のお題は「波除(なみよけ)」です。波除という地名は貞享元年(1684年)に、今の安治川の土砂を積み上げて造られた人工の山「波除山」からきてるそうです。波除山は、河村瑞賢(かわむらざいけん)が造ったことから「瑞賢山」とも、また舟人の目印になっていたことから「目印山」とも言われていました。現在、その姿はなく波除の名前だけが残っています。

人工の山と言え、すぐに天保山を思い浮かべますが、波除山の方がずっと先輩です。天保山ができたのは名前のおり天保2年(1831年)から3年にかけてで、波除山はそれより150年くらい前です。「生類憐みの令」で有名な綱吉の時代ですから古い話です。どちらの山も、安治川の土砂からできたという共通点があります。

今回の小噺は、安治川・天保山親子の会話ですので、頭を柔らかくして読んでください。

天保山(子)－ えーっ!お母ちゃん、それほんま?僕にお兄ちゃんがおったって言うのは。

安治川(母)－ ほんまやで、あんたには同じ土を分けた「波除山」というお兄ちゃんがおったんや。今おったら318歳や。

天保山 － えーっ!318歳!お母ちゃんが何歳の時に産んだん?

安治川 － えーと、お母ちゃんがちょうど…。いらんこと言わしな。

天保山 － でも不思議やな、お兄ちゃんも僕も川からできてんなあー。お父ちゃんは誰や?



安治川－ 波除山もあんたも人工の山やから、港区の人たちが造ってくれたようなもんや。港区の人をお父ちゃんと思ってええで。

天保山－ でも、そんなこと、港区の人は納得してくれるやろか。

安治川－ 大丈夫。みんな、なっとくしてくれる。みんななっとく、みな とく(港区)してくれる。

バンザーイ!!



おあとがよろしいようで。

— 市岡・石田・田中・八幡屋・福崎 —



大阪歴史博物館蔵

こんにちは、桂あさ吉です。22年間港区に住んでおりました。実家は南市岡です。その港区が昔、田んぼだらけだったとは知りませんでした。元禄から江戸時代後期にかけて新田開発が盛んに行われ、その中には市岡、石田、田中、八幡屋、福崎等の新田があります。それぞれ開発者の名前がついてまして、今の港区の地名にもしっかり残っております。

という訳で今回は、港区の新田開発にかかわった御先祖様に登場していただきます。きっと天国から港区を見守ってくれてるはずですよ。

市岡与左衛門 — いやー、しかし港区の様子もだいぶと変わってきましたなあ。

田中又兵衛 — そうでんなあ、わたしが生きてた頃は田んぼだらけでしたけど、今はすっかり変わりましたなあ。

石田三右衛門 — まあでも、昔とは状況が全く違いまっさかいなあ。人口も増えてきたし、見てみなはれ、川の色も違いまっしゃる。

八幡屋忠兵衛 — ほんにそうやなあ、けどうれしいことに、田んぼは無くなっても、我々の名前は残ってますなあ。

福崎孫四郎 — はいはい、市岡さんも、田中さんも、八幡屋さんも、石田さんも、そして私の福崎という名前も…

市岡与左衛門 — それは私も喜んでまんねん、わたしが開発した新田は無くなっても名前はちゃんと残してくれてる。

田中又兵衛 — やっぱり、新田にかかわっただけに、苗字(みょうじ)は残してくれたんやなあ。



おあとがよろしいようで。

－ 弁天 －



弁財天

どうもこんにちは、桂あさ吉です。
今回のお題は「弁天」です。弁天の地名の由来は、あの七福神の弁天さんから来てるそうです。昔、度重なる水害に苦しんだ新田開発者市岡与左衛門が、その難を逃れようと水に縁のある弁天さんをまつりました。そのお社(やしろ)のあった土地が今の弁天です。
そこで、弁天さんが出てくる有名な小噺をご紹介します。

神さんや仏さんには、よくお使いというものがおります。使者ですね。弁天さんですとヘビ、大黒さんはネズミ、毘沙門天(びしゃもんてん)さんは百足(ムカデ)を使うそうです。

ある日、毘沙門天さんが弁天さんのところへ急な用事ができまして、手紙を一本渡したい。そこで、お使いの百足を呼びました。

毘沙門天－これ、百足。こっちへ来なさい。

百足－はい、ご用ですか。

毘沙門天－うん、この手紙を弁天さんの所へ持って行ってもらいたい。

百足－はい、かしこまりました。すぐに行きます。

1時間後に、毘沙門天さんが見えますと、百足が手紙を持ってまだゴソゴソしてる。

毘沙門天－これっ、百足。おまえ、まだ弁天さんの所へ行ってないんかいな。何をしてるねん！

百足－すみません。わらじをはいとりまんねん。



毘沙門天

おあとがよろしいようで。

- 夕凧 -



市岡パラダイス

どうもこんにちは、桂あさ吉です。
 今回のテーマは「夕凧」です。夕凧の地名は、昔、井路川(いじがわ)に架けられた橋の名に由来しています。ところで、夕凧ってオシャレな地名ですね。辞書を引いてみますと、「海岸地方で、昼の海風から夜の陸風に交替する夕方の2～3時間、風がやんで海がなぐこと。」(講談社「日本語大辞典」とあります。

この粋な地名の夕凧は、港区のほぼ真ん中に位置しております。その昔この辺りに、大娯楽施設「市岡パラダイス」があったそうです。その中には、大劇場や千人風呂、映画館、アイススケート場などがありました。中でも、園の中央にあった飛行塔は、高さ一八間(約30メートル)もあり、東洋一を誇っていました。港区って、昔から観光施設があったんですね。

子供 - 静かやなあー、お父ちゃん。

父 - そうやなあ、風がピタッとやんで…。夕凧やなあ。

子供 - ゆうなぎ？

父 - そう、夕凧。

子供 - ゆうなぎって何？

父 - ちょうど、今のような状態や。

子供 - ああ、わかった！ゆうなぎってハラペコのこと！

ああ、おなかすいた。晩ご飯まだかな？

父 - …。



おあとがよろしいようで。

あさ吉夜話

■ 其の八

－ 池島 －

どうもこんにちは、桂あさ吉です。

今回のテーマは「池島」です。池島の地名は、昔、三つの井路川(いじがわ)に囲まれた土地に池があったことに由来しています。ところが、地図で確認してみると、島はありません。そこで昔の港区の地図を見てみると、ありました。

ちょうど、今の池島2丁目のあたりが、確かに三角形の島ようになっておりました。当時の八幡屋運河、新池田町の井路川、三十間堀川(これは今も存在します)に三方を囲まれるような形でした。こうしてみると、港区もだんだんと地形が変わっていているんですね。

よっちゃん　－おーい寅ちゃん、今日は池島に釣りに行こうや。
寅(とら)　　－あの池か？
よっちゃん　－そうや、あそこに大きなナマズがおるらしいで。
寅　　－よっしゃ、行こ行こ。
よっちゃん　－おかしいな、確かこのあたりに池があったはずやねんけど。
通行人　　－どうしたんや、迷子か？
よっちゃん　－違う違う、このあたりに池があつてんけど…。
通行人　　－ああ、ここの池は埋め立てられて、もうないで。
よっちゃん・寅　－えー！
よっちゃん　－知らなかった、いつの間に?しょうがない。
寅ちゃん、三十間堀川で釣りして帰るか。

よっちゃんと寅の二人は三十間堀川で釣りを始めました。

寅　　－よっちゃん、引いてるで。
よっちゃん　－ほんまや！寅ちゃん手伝って、大物らしい。もしかしたら、大ナマズちゃうかー。ウワー。引きづり込まれるー。
(ドボーン)
母　　－ちょっと、いつまで寝てんの、学校に行く時間やで。
よっちゃん　－ウワー。助けてー。
母　　－何言うてんの、この子は。はよ学校に行く準備しなさい。
よっちゃん　－あれっ、ナマズは?池がなくなって…、埋め立てられてんで…。
母　　－何を寝ぼけてんの?あんた、また寝小便してるやないの。
よっちゃん　－あつ、こんなところに池があつた！

おあとがよろしいようで。

— 三先 —

どうもこんにちは、桂あさ吉です。

今回のテーマは「三先」です。港区は江戸時代の中期から後期にかけて新田開発され、市岡新田をはじめ、ほとんど田んぼに覆われていました。そして、市岡新田の農業用水は尻無川から引いていたそうです。その農業用水を取り入れるための樋(とい)が三つ並んでる所があり、三ツ樋町(みつひちょう)と名付けられました。現在の福崎1丁目あたりです。その三ツ樋町の先にある地域が三先、今回のテーマの三先が登場するわけです。

- 息子　　－お父ちゃん、今年は大豊作やなあ。
父　　　－そうやなあ、大きな水害もなかったし、
 今年はいえ米がとれた。
息子　　－やっぱり尻無川からあの三つの樋で水
 を引いてるおかげかな。
父　　　－うん。あの三つの樋は大事な仕事をし
 てるなあ。そやさかい地名にも三ツ樋町
 とついでるんや。
息子　　－そうかあ。
父　　　－その先にある所は、三ツ樋町の先やか
 ら三先と言うんや。
息子　　－へえー。お父ちゃん、よう知ってるなあ。
 よーし、みっちゃんに言うて自慢したろ
 う。
息子　　－おーい、みっちゃん、三先はなんで三先
 って言うか知ってる？
みっちゃん－いいや、知らんで。
息子　　－ほな教えたらか！
みっちゃん－教えていらんよ。
息子　　－いいや、教える。三先は三ツ樋町のな
 あ…。
みっちゃん－先にあるから三先か？
息子　　－君、先言うたらあかんわ。
 きみさき言うたらあかんわ。



おあとがよろしいようで。

あさ吉夜話

■ 其の十

— 三十間堀川 —

桂あさ吉です。今回のテーマは「三十間堀川」。港区福崎の臨海地区を流れる運河です。天保山運河に連絡して、尻無川と安治川に通じています。文政・天保年間の開削といわれ、幅が三十間あったところから三十間堀と呼ばれるようになりました。一間が約1.8メートルですから約54メートルの幅です。

この「間」とか「尺」とか「寸」は、今でも職人の方は使いますし、着物の寸法を測る時もそうです。古典落語の世界にはもちろんメートルもセンチメートルもできません。寸・尺・間で。こっちの方が日本人に合っていて便利なのかもしれません。

定吉 — お父ちゃん、ちょっとこの着物小さくなってきた。

父 — ほんまやなあ、丈も袖もつんつるてんやなあ。

おまえ背が伸びたんちゃうか？ちょっとその柱の所に立ってみい。うわー、この前測った時より二寸五分も伸びてるわ。

定吉 — やったあー、大きくなった！

父 — お母さん、ちょっとこの着物を直してあげて。

母 — はいはいわかりました。すぐにやってあげるわ。

定吉 — お母ちゃんも背が伸びたんちゃう？着物がちょっと短い。

父 — 定吉、お母さんは、おなかが出てきただけや！

母 — …。



おあとがよろしいようで。

- 入舟 -

どうもこんにちは、桂あさ吉です。

今回のテーマは「入舟」。昔、入舟町という地名がありました。現在の池島と八幡屋の辺りで、舟の出入りが多かったことからつけられました。

入舟という町名は、どこか懐かしい響きがあります。実際にこの町名があったのは大正から昭和にかけてですが、清八、喜六が生きていた、わたしの大好きな古典落語の時代の町の雰囲気を感じさせます。

周りを海と川に囲まれている港区では、舟は人や物を運ぶのに大活躍していました。今よりも、もっと深くそして細やかに舟は生活にかかわっていました。

舟頭　　－ 舟が出るぞー！

喜六　　－ おい清八。そろそろ行った方がええんとちゃうか。
「舟が出るぞー」って言うてるで。

清八　　－ 大丈夫、大丈夫。ああいうのはな、何べんも言うてくれんねん。
この甘酒飲んでから行こう。

舟頭　　－ 舟が出るぞー！

喜六　　－ おいっ、ほんまに大丈夫か？もう行こうや。

清八　　－ 大丈夫、大丈夫。心配すんな、まだ甘酒が残ってんねん。

舟頭　　－ 舟が出たぞー！

清八・喜六－ …。



おあとがよろしいようで。

あさ吉夜話

■ 其の十二

－ 尻無川 －

どうもこんにちは、桂あさ吉です。

毎月、港区の地名にまつわる小噺を書かせていただいたこのコーナーも、いよいよ最終回を迎えました。

トリを飾りますテーマは「尻無川」です。



大阪歴史博物館蔵

祖父－祐太郎、ちょっとおじいちゃんと散歩に行こか。

孫－うん、行こ！

祖父－祐太郎、この尻無川というのはかわった名前やろ。

孫－うん。

祖父－この川はなあ、昔々川尻がもっと上流やったんや。そしてその辺りは、アシが生い茂り、どこが川の尻かわかれへん、まさに尻無川やったんやで。

孫－へえー。

祖父－おじいちゃんが小さい時は、ようこの川の下流でシジミをとったもんや。土手にはハゼの木がズラーツと並んで、秋になると真っ赤に紅葉してきれいかったで。

孫－だいぶと様子が変わったんや。

祖父－これは、時代の流れや。大正3年から5年にかけて大工事があつた。舟を通りやすくするために、川幅を広げて、川底を深く掘り下げたんや。その川底の土でこの堤は作られたんやで。

孫－おじいちゃんは、港区の生き字引やなあ。

祖父－今も残ってる尻無川の水門や甚兵衛渡(じんべえわたし)は、港区と水との歴史の象徴のように思う。

孫－水の都大阪って言うけど、港区はまさにその典型やな。

祖父－祐太郎、ええこと言うなあ。そんなこと誰に教わったんや？

孫－だって、おじいちゃんからその話聞くのん今日で5回目やもん。



おあとがよろしいようで。

永らくご愛読いただきありがとうございました。皆さん、港区の町名の由来について、ぜひぶん詳しくなっていたいただきたいと思います。また、新しい企画をしていきますので、ご意見をお寄せください。

どこかであさ吉さんに出会ったら、声をかけてあげてくださいね。